

A.E. Laïou and R.P. Mottahedeh eds.,

*The Crusades from the Perspective of
Byzantium and the Muslim World*

橋 川 裕 之

近年、欧米の歴史学界では十字軍をめぐる議論が非常に活発に行われ、様々なタイプの関連出版物が店頭を賑わせている。近代歴史学草創以来の地道な実証研究の積み重ねが新世代の優れた研究者の台頭にもなつて一斉に開花した、という見方もできなくはないが、この現象の主たる要因は、十字軍が現在、非常にタイムリーなトピックであるという事実に求められるだろう。クレルモン公会議で教皇ウルバヌス二世が十字軍演説を行ったのが一〇九五年、史上最初の十字軍遠征が実施されたのが翌年の一〇九六年であり、それぞれ一九九〇年代に九〇〇周年を迎えた。そして今年、二〇〇四年は第四回十字軍士らによるコンスタンティノール占領から八世紀を記念する年である。残念ながら、この間、わが国において十字軍が格別大きな注目を集めることはなかったが、欧米では十字軍への社会的な関心の高まりを受けて、一般読者を想定した多くの書物が刊行された。また、学界では十字軍運

動を批判的かつ学術的に再考しようとする機運が高まり、各地で大規模な研究集会が開催された。ここに取り上げる書物はそうした研究集会の一つ、アメリカの高名なビザンツ史家アンゲリキ・E・ライウとイスラム史家ロイ・バルヴィズ・モッタヘデが主催者となり、一九九七年にダンバートン・オークスで開催されたシンポジウムの報告集である。

本書は I. Introduction; II. Crusades and the Holy War; III. Approaches and Attitudes; IV. The Crusades and the Economy of the Eastern Mediterranean; V. Art and Architecture の五部から構成され、アメリカ国内外一五名の研究者の論文が収録されている。その開始から九世紀を経た十字軍運動を西ヨーロッパの外部、すなわちビザンツ、ムスリム世界の側から多面的に考察するという野心的なプロジェクトに参加した諸分野のエキスパートたちは、いかなる議論を行い、伝統ある十字軍研究にいかなる貢献をなしているのか。以下では、まず本書に取められた論文の内容を一通り紹介し、最後に本書が持つ意義について論評してみた。

序論にあたる第一部には、アメリカの著名な中世文化史家 G. コンスタブル (Giles Constable) の史学史的論文「The History of the Crusades」が配されている。この論文で彼は、十字軍についての歴史叙述を中世から現代にいたるまで丹念に跡づけ、ヨーロッパ史の他の諸現象にもまして、十字軍がヨーロッパの鏡的な役割を果たしてきたことを指摘している。イスラムの脅威が現実的であった中世において、十字軍は概して、西ヨーロ

ツパの文化的同一性を脅かす対象へのリアクションとして描写されていたが、イスラムの脅威が実質的に過ぎ去った啓蒙時代には、世俗の利害や宗教的熱狂によって動機づけられた中世ヨーロッパ人の野蛮的営為として理解された。厳密な史料批判に基づく歴史研究が本格化した一九世紀、また、十字軍がその事件史的な側面を越え、理念や十字軍国家、宣教といった多様な側面から検討されるようになった今日でも、十字軍には嫌悪、賞賛、郷愁といった観察する側の思想や感情がつきまとい、新たな神話が生み出されつつづけている。細かな知識を一つ一つ積み重ねていけば、いずれは完全なる理解に到達するといった一九世紀的信念が幻想として退けられた今日では、十字軍叙述は常に異なる角度から解釈されねばならないとコンスタブルは結んでいる。

第二部では、モッタヘデとアル・サイード (Ridwan al-Sayid) に于ける「The Idea of the Jihad in Islam before the Crusades」(George T. Dennis) の「Defenders of the Christian People: Holy War in Byzantium」が、それぞれイスラムとビザンツにおける聖戦理念の問題を論じている。前者は十字軍以前の時代におけるジハード概念の多義的な状態に焦点を当てている。今日では、ジハードは一般的に、ムスリムにとっての永続的かつ普遍的な宗教的責務である「イスラムのための聖戦」と理解されている。しかし、モッタヘデとアル・サイードによれば、西暦七世紀後半から八世紀にかけては、二つの対抗的なジハード理解があったという。一つは、ジハードをムスリムによる非ムスリム世界への積極的攻撃義務として理解するもの(攻撃的ジハード)、他方は、ジハードをイスラム共同体の防衛戦争にの

み適用可能な概念と理解するもの(防衛的ジハード)である。八世紀以降、主流となったのは、シリアの学者たちによって支持された攻撃的ジハード理解であったが、法学者たちは、軍事指導者らによるジハード概念の濫用を規制すべく、ジハードはカリフやイマームのような合法的指導者の指揮する戦争においてのみ有効な概念であると主張するようになる。モッタヘデとアル・サイードは、十字軍がムスリム世界のジハード理解にいかなる影響を与えたのかという問題にまでは踏み込まないが、ジハード概念がイスラム初期の時代にあつてすでに多義的、可変的であり、さらにその法的解釈が同時代の政治、社会状況と密接にリンクするものであったことを説得的に示している^⑤。

中世の地中海世界において、聖戦理念がムスリム世界や西欧と同様の発展を見なかったのはビザンツである。ビザンツ人にとって、ジハードにせよ十字軍にせよ、戦闘や殺人を宗教権威によって正当化する行為は嫌悪の対象であった。ビザンツにおいて聖戦(hieros polemos)という語は、古代ギリシアの戦争を描写する際にのみ使用された。つまり、ビザンツでは現実の戦争を聖なる戦いとして正当化する発想は反宗教的、反教會的であったのである。宗教的な戦争とは、帝国が周辺諸国との間で現実に行う戦争というよりむしろ、修道士がその禁欲生活によって行う悪霊との霊的戦い(pneumatikos polemos)であった。ビザンツの軍事事史に通暁するデニス^⑥は、こうしたビザンツの平和主義的な戦争観が、実際の戦闘行為や、戦争マニュアルといった史料類にも反映されていると考えている。というのは、ビザンツにおいては、領土奪回のための戦争や領土防衛のための戦争が専ら称揚され、実際に

戦闘が生じる際は、自軍、敵軍共に、いかに犠牲者を出すことなく勝利するかが一貫して追及されていたからである。デニスの主張するところでは、ビザンツの戦争は、聖戦ではなく、帝国戦争(imperial wars)であり正戦(just wars)と表しうるものだったのである。

第三部には、地中海東方地域における十字軍インパクトを社会文化史的な視角から考察した六篇の論文が収録されている。リヨン(M.C. Lyons)の「The Land of War: Europe in the Arab Hero Cycles」やヘル・シェイク(Nadia Maria El-Cheikh)の「Byzantium through the Islamic Prism from the Twelfth to the Thirteenth Century」は、ともに中世アラビア語史料の分析を行っている。リヨンは、テキストとして現存する英雄伝承に見られるヨーロッパ表象を検討し、虚構と史実の織り交ざった伝承のうちに、アラブ・ムスリム世界のアイデンティティの動揺を見出す。リヨンによれば、この動揺は、十字軍が地中海東方ムスリム世界の権力の真空を突き、アラブ人に現実的な恐怖を与えたことだけでなく、十字軍に対する防衛が、トルコ人、クルド人、マムルークといった非アラブ系集団によって主導されたことから生じたのである^③。

エル・シェイクは、英雄伝承以外の作成年代が特定可能なアラビア語史料に注目し、一二世紀と一三世紀におけるアラブ人のビザンツ観を検討している。アラブ人のビザンツ観という問題においても、同時期の東方を席卷した十字軍のインパクトは無視できない要素となっている。すなわち、十字軍運動の結果、ビザンツ人(al-Rum)から西ヨーロッパ人を明確に区別するための新語

「フランク人(al-Ifrani)」が登場し、一般的に使用されるようになる。そして、アラブ人著述家のビザンツ描写から、かつての描写を特徴づけていた否定的な要素が軒並み消え、ビザンツはその高度な物質文明を積極的に評価されるようになる。一方、著述家たちがフランク人の行動や慣習を強く非難していることから、エル・シェイクによれば、ビザンツ観の大転換は、十字軍運動の脅威という同時代の政治状況を直接的に反映しているのである。

十字軍を最大の脅威として描いたアラビア語史料と対照をなすのは、中世アルメニアの歴史記述である。トムソン(Robert W. Thomson)の「The Crusades through Armenian Eyes」は、直接には十字軍を経験しなかった大アルメニア地方の歴史家たちの十字軍理解を考察している。ここでも重要な要因となっているのは、アラブ・ムスリム世界と同様、同時代の政治状況であるのだが、大アルメニアの場合は、アルメニア特有の黙示思想と歴史意識が大きな役割を果たしている。つまり、トルコ人、次いでモンゴル人に支配された彼の地において、旧約聖書のダニエル書や、東方キリスト教世界に広く流布した偽メトディオスの黙示録といった黙示文学の強い影響のもと、十字軍は、近い将来にアルメニアを異民族支配から解放し、終末の到来を告げ知らせる救世主的勢力として描かれたのである。歴史的に見れば、十字軍が大アルメニアに到達することはなく、大アルメニア史家の西方勢力への期待は幻想に終わった。こうした彼らの終末論的待望が、単なる文学上のレトリックを越え、何かしらの政治的品格を帯びるものだったのかどうか、気になるところではある。

第三部の後半三篇はいずれも著名なビザンツ史家による論考で

ある。故カジエタン (Alexander Kazhdan) の「[Latins and Franks in Byzantium: Perception and Reality from the Eleventh to the Twelfth Century]」が取り上げているのは、ビザンツ社会における西欧人流入の問題である。西ヨーロッパ社会の発展は、十字軍運動を含む様々な局面において、ビザンツ人と西欧人の接触機会を増加させた。カジエタンはまず、知識人の著述に現れる民族名称を仔細に検討し、一一世紀から一二世紀にかけて西欧人を統一的に表す呼称「ラテン人 (Latino)」が登場し、その一方で、国内で活動するノルマン人傭兵が「フランク人 (Frankoi)」と呼ばれるようになったことを示す。次いで、プロンボグラフィの手法を用いて「フランク人」の社会的な地位を検討し、コムネノス朝の諸皇帝、とりわけマヌエル一世が彼らを重要な軍事ポストから遠ざけていたとしている。一一、一二世紀を通じて、多くの西欧人がビザンツを来訪し、政治から商業まで多様な活動に従事する中で、皇帝は、傑出した軍勢力を誇るノルマン人傭兵団をコントロールする必要性に迫られていたのである。以上のようなカジエタンの考察は、近年盛んなコムネノス朝期についての政治文化史研究の成果と概ね合致しているといえよう。

E・ジェフリーズ (Elizabeth Jeffreys) と M・ジェフリーズ (Michael Jeffreys) の「The "Wild Beast from the West": Immediate Literary Reactions in Byzantium to the Second Crusade」は、文学研究的な視座からビザンツにおける十字軍インパクトを検討した興味深い論考である。両ジェフリーズが着目したのは、マンガネイオス・プロドロモス (実際は作者未詳) の未公開詩集に収録されている二つの詩 (第二〇詩と第二四詩) である。

両詩が重要であるのは、それらが一一四七年に実施された第二回十字軍、より具体的には、神聖ローマ皇帝コンラート三世のビザンツ領進軍についての数少ない同時代証言であり、さらには、このコンラート以下の十字軍士らをきわめて辛辣な筆致で描いているためである。マンガネイオスは、動物や古典、聖書などのモチーフを自在に操りながら、十字軍士らを西方から到来した野獣として描き、新ローマであるコンスタンティノープルが旧ローマに優越すると述べる。マンガネイオスは皇族や高位貴族らをパトロンに活動していたことから、彼の詩、彼の声には宮廷内に読み手、聞き手が存在していた。マンガネイオスの両詩は、歴史家キンナモスやコニアテスに見られる第二回十字軍に関する比較的好意的な記述が、あくまで一つの見方に過ぎなかったことを明らかにするのである。なお、論文脚注には原典からの引用が多く付されているので、中世ギリシア語を解する読者であれば、両ジェフリーズの議論を実際の史料と照合しながら理解することができる。

続くアメリカの若手ビザンツ史家コルバーバ (Tia M. Kolbaba) の「Byzantine Perceptions of Latin Religious "Error": Themes and Changes from 850-1350」も重要論考である。コルバーバがビザンツの十字軍インパクトを考える上で検討対象に選んだのは、九世紀から一四世紀中葉にかけての宗教・教義問題である。彼女は、両世界を取り巻く政治状況に配慮しながら、ビザンツ教会とローマ教会との間に生じた教義論争の変遷を跡づけ、論争対象となった問題だけでなく、論調自体も時代的な変化を被っていると主張している。例えば、彼女によれば、東西教会間の最大の教義問題と今日一般に見なされているフィリオクエ (聖

靈の發出」問題)も、ビザンツにおいてそう理解されたのは一二世紀後半であり、それ以前は、フィリオクエは多くの問題の中の一つという位置づけに過ぎなかった。また、教義問題が熱を帯び始めたのは、一二世紀以降であり、東西教会分離(シスマ)の発生として知られている総主教ケルラリオスと枢機卿フンベルトゥスの一〇五四年の諍いも、それが深刻な事件として認識されたのは一二世紀になってからなのである。こうした点にコルバーバは、十字軍の間接的ではあるが、きわめて深潭な影響を読み取っている。すなわち、少なくとも教会の領域において、十字軍は、反ラテン感情を核にビザンツ・アイデンティティを明確化させる役割を果たしたのである。コルバーバのこの論文は、ビザンツの「反ラテン文書」を包括的に検討した彼女の著書 *The Byzantine Lists: Errors of the Latins* (Urbana, 2000) と合わせて、われわれが今後ビザンツの文化的アイデンティティを議論する上での必読文献となるであろう。

十字軍と地中海東方の経済をテーマとする第四部に配されているのは、ムスリム交易史を専門とするO・コンスタブル(Olivia Remie Constable)の「Funduq, Fondaco, and Khan in the Wake of Christian Commerce and Crusade」および編者ライウの「Byzantine Trade with Christians and Muslims and the Crusades」ハイスラエルの中世史家ヤコーブ(David Jacoby)の「Changing Economic Patterns in Latin Romania: The Impact of the West」の三篇である。コンスタブルの論文は「十字軍時代の近東地域における旅行者、商人向け宿泊施設の様態と発展を制度史的な観点から検討している。一〇世紀ころまで、近東のム

スリム世界には、慈善施設としての役割も果たすフンドウクと、主に営利目的で運営されるハーンのと、二種類の宿泊施設が存在していた。一方、一二、一三世紀、西欧から十字軍士や商人が多数近東地域を来訪するようになると、キリスト教徒向けの営利的宿泊施設フオンダコがエジプトや十字軍国家内に出現する。十字軍国家の消滅後もフオンダコはエジプトやマグレブを中心に存続したが、一般的な宿泊施設としての性格は消え、専ら許可を得た西欧商人にのみ提供される商館として機能するようになる。コンスタブルは、このキリスト教徒向けのフオンダコの出現と変化が、十字軍時代以降のフンドウクとハーンの変化に一定の影響を与えたと考えている。というのも、内陸商業の活発化にともない近東のムスリム地域一帯でハーンが叢生する一方、フンドウクは、フオンダコと同様、宿泊施設から商館へとその性格を変じ、さらにはその地理的分布もフオンダコのあるエジプトやマグレブに限定されたからである。実際の論証は困難であるが、フンドウクに名称が由来するキリスト教徒向けのフオンダコが、その後のフンドウクの性格を変えていくという彼女の説明は興味深い。

ライウとヤコーブの論文はそれぞれ四〇頁近い大作である。ライウは、十字軍ならびに十字軍国家の存在がビザンツの国際商業関係にいかなる影響を及ぼしたのかと問いを立て、政治、経済、法制の各面から考察を行っている。まず彼女は、十字軍がビザンツ領を陸伝いに通過する際に行われた物資供給と外貨両替において、ビザンツの商人と銀行家が政府から特権を得た上で、独占的に活動していたことを確認し、彼らが一二世紀末の段階で帝国の商業政策を左右する存在にまで成長していたと指摘する。次いで、

彼女はビザンツの難破船財貨救出法 (the law of salvage) の展開プロセスに注目し、ローマ法に由来するビザンツの財貨救出法が、十字軍国家やイタリア都市、ムスリム国家との国際的商業関係の中で漸次的に発展し、一三世紀には地中海東方地域における国際法的な地位を確立するにいたったと論じている。またライウはビザンツとムスリムとの貿易についても検討し、それが、ビザンツと他のキリスト教勢力との貿易と異なり、政治・儀礼的な性格の強いものであったとしている。個々の論点についてはさらなる考証が必要だろうが、本論文は、ビザンツのギリシア語史料のみならず、西欧のラテン語・俗語史料にも精通したオールラウンドな歴史家ライウの実力が遺憾なく發揮された好論である。なお文末には、貨幣学者モリソン (Cécile Morrisson) による外貨両替レートについてのアベンディクスが付され、ライウの議論をサポートしている。

ヤコービの論文は、第四回十字軍以降、ラテン人支配下に置かれた旧ビザンツ領 (ラテン・ロマニア) の経済構造の変容を扱ったものである。具体的には、彼はクレタ島を中心とするヴェネツィア植民地と、フランク人の支配するモレア公国の二地域を取り上げ、一三世紀から一五世紀にかけての両地域の経済構造の変容プロセスを跡づけ、さらにそこに生じた相違について論及している。ヤコービは、第四回十字軍が、従来のコンスタンティノープル中心型から西欧中心型へと流通構造を一変させたと指摘する一方で、一二〇四年以降の長期的な変容プロセスを重視する。彼によると、ラテン・ロマニア地域では、ヴェネツィアやジェノヴァが主導する海運の隆盛にともない、都市・農村の経済的関係が緊

密化し、広範に渡って大量の貨幣が流通した。この長期的な変容において、とりわけダイナミックな経済活動が見られたのは、ヴェネツィアが一三世紀を通じて漸次的に支配権を確立したクレタ島である。クレタ島はヴェネツィアの展開するロマニア・レヴァント貿易の中継拠点になると同時に、西欧向けの原料・商品生産が島内各地で活発化したことで、ラテン・ロマニア地域における一大生産拠点ともなったのである。ヤコービが重視しているヴェネツィア領クレタの役割については、経済史家に限らず、近年多くの研究者が関心を向けるようになっており、今後の研究のドラスティックな進展が期待される^⑦。

第五部は美術史・建築史の論文からなる。十字軍と十字軍時代のイスラム美術との関係性を検討したイスラム美術史家グラバー (Oleg Grabar) の「The Crusades and the Development of Islamic Art」は、中間報告的な性格の強い論文である。グラバーは、キリスト教的モチーフとイスラム的なモチーフが混在して見られる何点かの美術を分析し、一般に中東イスラム美術の発展期として理解されている一一世紀から一三世紀において、事件としての十字軍ないし十字軍国家の樹立は、同時期イスラム美術に大きな影響を与えることはなかったという暫定的な結論を導いている。

続くビザンツ建築史家ブラス (Charalambos Boursas) の「The Impact of Frankish Architecture on Thirteenth-Century Byzantine Architecture」も十字軍インパクトに対しては、グラバーと同様、懐疑的なスタンスをとっている。ブラスの主題は、一三世紀以降のビザンツ世界、とりわけペロポネソス地方におけ

る西欧のゴシック建築とビザンツ建築の影響関係である。十字軍士たちが支配した土地ではゴシック様式の教会が多く建築されたが、隣接するビザンツ領ではビザンツの伝統的な建築様式に基づいた教会と並んで、ビザンツ様式とゴシック様式の折衷的な教会が建設され使用された。ブラスは、この折衷型の教会にゴシック様式がどの程度の影響を与えているのかを様式と装飾の点から調査し、ゴシック様式は教会建築の一部分において限定的に採用されているのみであり、その他多くの部分は、ビザンツの伝統の様式に由来していると主張している。ブラスは、ビザンツ建築の一要素である様式の多様性を重視しているのだが、一一、一二世紀にはほとんど見られなかったこの要素が、一二〇四年以降に現れているという事実にかんがみると、われわれはビザンツの建築様式における十字軍インパクトをより積極的に評価する必要があるのかもしれない。

ガーステル (Sharon E.J. Gerstel) の「Art and Identity in the Medieval Mosaic」は、フランク人とビザンツ・ギリシア人が混住するモレアの教会や修道院で作成された壁画を、同時期ビザンツ人の文化的アイデンティティと絡めながら議論した刺激的な論考である。彼女はまず、フランク領モレアの壁画に見られる乗馬姿の戦士聖人に着目し、これに、乗馬姿の戦士聖人をモチーフにすることを好んだ十字軍国家美術の影響を読み取る。一方、同時期のビザンツ領モレアにおいても多く描かれた戦士聖人について、ガーステルは、それをビザンツ美術の一ヴァリエーションと見るのではなく、隣接するフランク領モレアの美術と伝統的ビザンツ美術との融合形態として捉えている。また、彼女によれば、

モレアの壁画美術において、十字軍美術とビザンツ美術の明確な融合が見られるのは戦士聖人の場合のみであるという。この事実を踏まえて、彼女はビザンツ領モレアにおいて描かれた戦士聖人を美術の融合という単なる一現象としてではなく、外圧にさらされたモレアのビザンツ人による文化的アイデンティティの美術的表現として解する。つまり、彼らは外的勢力であるモレアのフランク人たちが好んで描いた戦士聖人像を自分たちの美術に積極的に受け入れ、共同体の安寧への希望を描かれた戦士聖人に託したのである。無論、ガーステルの以上のような議論は仮説の域を出るものではなく、おそらく論証も困難であると思われるが、依然未解明の問題が多く残るモレア美術研究への一つの重要な貢献であるといえよう。

一九世紀の歴史学において自らを十字軍史家としてアイデンティファイする人々が解明に専心したのは、十字軍の事件史、制度的な側面であった。二〇世紀になると、前世紀の研究を踏まえた上で、十字軍の全体像を把握しようとする試みが本格化し、これは碩学S・ランシマンの三巻本『十字軍の歴史』とK・セットン編の六巻本『十字軍の歴史』という二つの記念碑的な仕事に結実する。G・コンスタブルが巧みに描きだしているように、この二つの仕事は、十字軍の事件史的な研究を下火にするとともに、事件史に留まらない、より幅広い十字軍史研究への道を拓いた。その結果、二〇世紀後半から現在まで、聖戦理念、十字軍国家、北方十字軍、民衆十字軍、対異端十字軍、十字軍説教といわゆる十字軍研究が対象とするテーマはさながら星雲のように拡大した

のである。注目すべきは、テーマが拡散しつつも十字軍研究には一つの大きな枠が存在していた点である。すなわち、それは「西ヨーロッパ世界の歴史的發展」を研究するという暗黙の了解である。私見では、十字軍研究の領域で、西ヨーロッパ発展の研究から文化接触・文化変容の研究へと問題関心を大きくシフトさせる役割を果たしたのは、本書の執筆者の一人であるD・ヤコービやB・アーベル、B・ケゲールといったイスラエルの歴史家たちである。彼らは十字軍時代の地中海東方においてラテン人の存在やラテン文化が果たした意義について精力的に考察を進めており、おそらくはこうした彼らの仕事が本書の企画への導きの糸となっているものと思われる。

十字軍とそのインパクトを西ヨーロッパの外部世界から理解するというテーマは、ギリシア語やアラビア語などの非ラテン語史料を読解することが不可欠となるので、ラテン語・俗語史料に依拠した従来の十字軍研究では総じて未開拓である。また、それはビザンツ史やイスラム史の分野でも実質的に近年、研究の緒についたばかりである。したがって、ビザンツとムスリム世界双方における十字軍インパクトを思想、社会・文化、経済、芸術の諸面から考察するという本書の企画は、十字軍研究史の上で最初の試みということになる。本書の学術的な価値をよりいっそう高めているのは、コンセプトの明快さと個々の執筆者の力量であろう。本書の執筆者は、まさしく世界的に知られた専門家たちであり、彼らは編者のコンセプトを十分理解した上で、それぞれ水準の高い議論を展開している。

編者ライウはその序文で、本書がビザンツとムスリム世界から

見た十字軍運動を包括的に検討するものではないと述べている。確かに、本書は両地域から見た十字軍の全体像を提示するものではないが、本書を通読すれば、読者は十字軍インパクトなるもののアウトラインを把握することができる。十字軍は単なる政治・軍事的な運動として東方地域に作用したわけではない。十字軍は、西欧、ビザンツ、ムスリム世界それぞれの地域における戦争観念の相違を浮かび上がらせた。また、突如出現した暴力的な他者として、ある地域では、恐怖や嫌悪の感情を喚起して人々のアイデンティティを揺さぶり、別の地域では、それが東方世界に与えた軍事的インパクトゆえ、終末論的コンテクストにおいて理解された。そして十字軍は、イタリア都市共和国の成長とそれが担う海運の隆盛と相俟って、地中海東方の経済構造を大きく変容させ、さらには、芸術の分野でも、異なる様式間の対話・相互作用を促進したのである。

惜しむらくは、本書において、政治、軍事、外交に関する問題が部分的にしか取り上げられていないことだろう。十字軍運動は、ビザンツとムスリム世界の心性や経済、美術に与えたのと同程度に、同時代の政治、軍事、外交にも影響を与えたはずである。こうしたトピックは確かに、現在の十字軍研究の中では主流ではないかもしれないが、諸文化の接触や交流を広く検討するときには考察が不可欠となるだろう。これに関連して言えば、本書第三部の主題となっている人々の見方（パースペクティヴ）や認識は、単なる文学上の表象に留まらず、何かしらの政治的性格を帯びるのが常である。ビザンツやムスリム世界の人々が西方から到来した十字軍士をどのように認識し、彼らの多種多様な認識が同時代

の政治や社会にどのように関係していくのかという問題は今後より深く検討しなければならぬだろう。また、本書では主として十字軍がビザンツとムスリム世界に直接、間接に及ぼした影響が扱われているが、影響の相互作用的側面を解明することも重要な課題となるに違いない。

以上のような若干の物足りなさはあれども、本書が近年出版された十字軍関連書籍の中で、学術的にひととき重要なものであるという事実に変わりはない。本書は、従来の西ヨーロッパ的視点に偏った十字軍研究に対する一つの重要なオルタナティブであり、新たな議論の出発点である。展開されている議論は非常に高度であるが、このオルタナティブは十字軍運動そのものと十字軍研究の可能性に関心のある読者すべてに開かれている。

- ① 初期ムスリム世界におけるシムーン概念の発展について M. Bonner, *Aristocratic Violence and Holy War: Studies in the Jihad and the Arab-Byzantine Frontier* (New Haven, 1996) → 参照せよとよくいわれている。
- ② ビザンツの戦争観念について 以下の文献も合わせて参照された。A. Kolias-Dermitakes, *O βυζαντινός “ιερός πόλεμος”* (Athens, 1991); A. Laiou, “On Just War in Byzantium”, in S. Reinert et al eds., *To Hellenion: Studies in Honor of Speros Vryonis Jr.*, v. 1 (New York, 1993), 156-77; T. M. Kolhaba, “Fighting for Christianity: Holy War in the Byzantine Empire”, *Byzantion*, 68 (1998), 194-221; J. Haldon, *Warfare, State and Society in the Byzantine World, 565-1204* (London, 1999), 13-33.

- ③ Cf. M. C. Lyons, *The Arabian Epic: Heroic and Oral Story-Telling*, 3 vols. (Cambridge, 1997)
- ④ Cf. N. M. El-Cheikh, *Byzantium Viewed by the Arabs* (Cambridge, Mass., 2004).
- ⑤ Cf. T. M. Kolhaba, “The legacy of Humbert and Cernarius: the tradition of the ‘Schism of 1054’ in Byzantine texts and manuscripts of the 12th and 13th centuries”, in: Ch. Dendinos et al eds., *Porphyrogenita: Essays on the History and Literature of Byzantium and the Latin East in Honour of Julian Chrysostomides* (Aldershot, 2003), 47-61.
- ⑥ Cf. O. R. Constable, *Housing the Stranger in the Mediterranean World* (Cambridge, 2003).
- ⑦ 例えば、近年刊行された重要なギリシア語の歴史書は Ch. Gasparet, *Η γη και ο γότος στη μεσαιωνική Κρήνη, 13ος - 14ος αι.* (Athens, 1997) 社会学史的 S. McKee, *Uncommon Dominion: Venetian Crete and the Myth of Ethnic Purity* (Philadelphia, 2000) & M. Georgopoulou, *Venice's Mediterranean Colonies: Architecture and Urbanism* (Cambridge, 2001) などである。
- ⑧ 本書以外に注目した価値ある仕事として C. Hillenbrand, *The Crusades: Islamic Perspectives* (Edinburgh, 1999); J. Harris, *Byzantium and the Crusades* (London, 2003); M. Angold, *The Fourth Crusade: Event and Context* (Harlow, 2003); R.-J. Lilje, *Byzanz und die Kreuzzüge* (Stuttgart, 2004) などがある。

(Dumbarton Oaks Research Library and Collection,
Washington, D.C., 2001, pp. vii + 297)
(日本学術振興会特別研究員)